

## はじめに

石垣島、西表島、竹富島、黒島、鳩間島、波照間島、与那国島等の八重山諸島全域においては、プレアデス星団、オリオン座三つ星、北斗七星、明けの明星、宵の明星等の多様で豊かな星名伝承が伝えられ、古謡には星が歌われている。また、石垣島、竹富島には星見石が存在する。「すまる」という言葉についても、南西諸島には特筆すべき伝承が伝えられている。本報告では、2020年11月までに実施した現地調査、アンケート調査、文献調査をもとに、八重山諸島全域の暮らしのなかで星を認知し形成された星名伝承についての調査研究成果を報告する。

## 1 プレアデス星団

### 調査成果の概要

(1) 石垣島(1979年、2019年調査、文献等)

- ・石垣市石垣…ムリカプシイ(喜舎場 1970a)
- ・石垣市大川…ムリブシイ、フナーブシイ(喜舎場 1970a)、ムルブシ(新崎C)
- ・石垣市平得…ンニブシイ(喜舎場 1970a)
- ・石垣市白保…ムリカブシ(石垣C)
- ・石垣市新栄町…ブリブシ(北尾による1979年調査)
- ・石垣市川平…ムリブシ(北尾による1979年調査)、ユブス(福澄孝博氏による調査等)
- ・石垣市登野城…ムリブシ(正木譲氏による)

石垣、大川、平得の星名は、ユンタに登場する。喜舎場永珣氏は、石垣市石垣のムリカプシイについて、「ムリカ星は、三方台に小団子を高く盛ったように、盛り上がって見えるから、方言で「盛ル<sup>ム</sup>星<sup>ブシイ</sup>」と言っている。その盛る星から転じて「カ」の愛称語をつけて、ムリカ星と称している」と記している。即ち、「可愛い盛る星よ」の意となる。また、大川のフナーブシイについて、「語源は組<sup>クナー</sup>星<sup>ブシイ</sup>の転である。組合っている星の集団の意」と記している。(喜舎場 1970a) ンニブシイについては、「魚群や鳥の群れをも『ンニ』(群れ)と称するところから『群れ星』すなわちンニ星とも称し…」と記している。(喜舎場 1970a)

また、川平のユブスについて、福澄孝博氏は、「われわれが沖縄の方言として認識しているムリブシを標準語で…と言い切った話者に、逆にお話いただいたユブスという名称が局所的地域に根ざしたも

のだと確信しました」と述べている。(福澄C) 地域において星名が多様なもので、本来はユブスと呼んでいたことを示唆する貴重な記録である。

また、1979年に星見石を案内して下さった石垣繁氏(白保出身)と宮地竹史氏の取り計らいにより再会し、次のように聞く。(宮地竹史氏同行)

- ・石垣市白保(旧 白保村)では、ムリカブシ、ムリカの「カ」はかわいいという意味でない。(石垣C)
- ・ユブス 川平 すばること「ユ」は「寄る」という意味。ユブス 寄る星 という意味。川平の群れ星の御嶽は、「ユブスオン(嶽)」と言う。

正木譲氏によると、登野城では、ムリカブシでなく、ムリブシ。フナーブシ、ムリカブシについて、正木譲氏は同じと捉えていた。

ところで、1979年、川平のユブスオンにて、次のように記録した。

「南風野家の女の子が、ナベに煮るものは食べないで、精進ばかりやっていた。女の子が夜中に必ずしっこ(おしっこ)しに行ったら、ちょうど向かいの山の中にムリブシ(群れ星)と通ずる火があったので、火をよく見ると、提灯が火をとぼして、おりたり、のぼったりこうして…。何かこりゃ妙な不思議なもんだ、自分ひとり心配してはいけないと思い、おうちの人に話したら…」

女の子が家族に話したところ、今度見えたとき家族を起こして確かめることになった。

「女の子は、見えたときには家族に知らせようと注意したところが、ちょうどまた例のとおりしっこしに行く、提灯が上と下にいったり来たり上下していたので、家族の人を起こしてきた。これは確かに、何か神からの知らせかもわからない、だから、よく場所を注意して記憶しておけよ、と言って、翌日、山の中に提灯がおりたところを見ると、お米の粉で机をしるしてられていた。これは確かに、ここに神さまがおりてこられたからお宮にせんといかん、というので、そこではじめて神さまのオガンをたててもらった」(北尾2001)(南風野英助氏の話)(写真下、川平のユブスオン、2020年3月撮影)

川平で最初に建てられたオガンで、群れ星と川平の人びとの深いかかわりを教えてくれる。



ユブスオン(石垣市川平)

(2) 西表島(1983年アンケート調査、2019年調査)

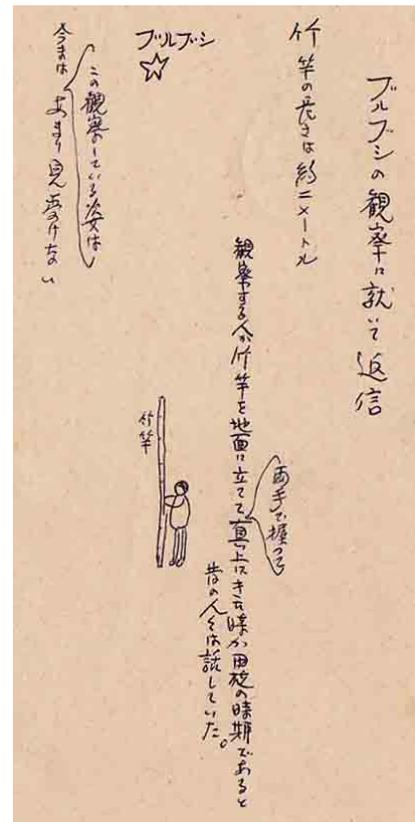
- ・八重山郡竹富町西表…ムリブシ、ブルブシ(アンケート調査)
- ・八重山郡竹富町祖納…ブリフシ(2019年調査)

日没後、農家が竹竿を直立させて、ブルブシが真上にある時が田植えの時期。東寄りの場合は田植えは早い。西寄りの場合は田植えは遅い。竹竿の高さは約2m。ブルブシの高度がおおよそ75度以上になれば真上と錯覚してしまう。1月20日過ぎくらいには間違えて田植えをしてしまう。西表島の田植え時期は2月からである。早すぎないように地面に竹竿を立てて両手で握ってブルブシがぼぼ天頂にやってくるのときを知ったのである。(北尾AC)

竹竿で天頂を観察した右図について、石垣繁氏は、「西表は山が多く東からのぼる群れ星を観察できないので天頂もありだ」と指摘。

- 竹富町祖納 TMTさん、祖納出身(父親は農業。漁業をしていなかった)、昭和9年生まれ

星のことをフシ。歩くフシと歩かないフシがある。ニヌファブシ 歩かないフシ。ブリフシ かたまって10個くらい。いつでも見える。そんなにはやくなくて歩いていく。(北尾C)(宮地竹史氏同行)



(3) 竹富島(1979年調査、文献等)

- ・八重山郡竹富町竹富…ムルカプシィ(喜舎場 1970b)、ムリカブシ(北尾C)

ムルカプシィは、喜舎場永珣氏著『八重山古謡 下巻』に掲載されている「七星ユングトウ」(竹富島)に、「ムルカ星<sup>ルックニン</sup> 六人ユ 人ダミュ ショウリッテ イユタラ オッティジ ウキダル ユンドウ 天ヌ真中<sup>マンナカ</sup> トウリオウル」(昂星<sup>スバルボシ</sup>の六人に、島の指揮者になってくれと命ぜられたら、畏りましたとお請けをしたわけで天空の真中を運行しておく)(喜舎場 1970b) 6個見えることから、「ムルカ星六人」と表現されている。

(4) 黒島(2020年調査)

- ・八重山郡竹富町黒島保里…ムルブシ、ムリブシ(北尾C)

- 八重山郡竹富町黒島保里(ほり)、MYTさん(昭和10年生まれ、黒島出身)

ムルブシ、ムリブシ。かたまって星をムルブシ。10あまりあると思う。ティンヌムルブシヤ ユミバユマリシガ ウヤヌユングトウヤ ユミヤナラヌ (むかしから父親の時代から歌われていた)

また、石垣市大浜のTUD氏(昭和12年生まれ、黒島出身)もムリブシと伝えていた。  
(通事安夫氏の案内による)

(5)鳩間島(1983年アンケート調査)

・八重山郡竹富町鳩間……ムリブシ(北尾AC)

(6)小浜島(1983年アンケート調査)

・八重山郡竹富町小浜…ムリブシ(北尾AC)

(7)新城島(1983年アンケート調査)

・八重山郡竹富町新城…ムリブシ(北尾AC)

(8)波照間島(2020年調査)

・八重山郡竹富町波照間…ムルブシ(新城C)(勝連C)

沖縄県石垣市平得において、島村修氏(大正15年生まれ、波照間島出身)から次のように波照間の星名を記録した。

「ムルブシ、6つあるから」「ムリブシネノジキ 麦をまきなさい 10日ずつ」(島村C)

(北尾注 一度にすると収穫が同時になるので少しずつ日をおいて植える…を10日ずつと表現したと思う)(通事安夫氏の案内)

(9)与那国島(1983年アンケート調査、2020年現地調査1月22日～24日、宮地竹史氏同行、1月25日、上地艶子氏同行)

・八重山郡与那国町…ブリブシ(アンケート調査)

・与那国町祖納…ムリブシ、ムリブチ

・与那国町久部良…ブリブシ

●与那国町祖納、昭和22年生まれの話者(祖納出身)の話

ムリブシ 群れている星。ムリブチが正しいかもしれない。

ブリブシ、いま高く見えるはず。(北尾注 1月訪問。日が暮れたらブリブシ45度くらい)

(与那国方言辞典編纂室、上地艶子氏の案内)

●沖縄県与那国町、昭和14年生まれ、NMさん、与那国町久部良(くぶら)出身

ブリブシ、かたまっている。おしゃくのかっこうで星が並んでいる。かたまっている。ブリブシ、かたまっている。おしゃくのかっこうで星が並んでいる。(北尾注、プレアデス星団を小さな北斗七星の形と捉える伝承事例は広く記録できる)

ブリブシ、かたまつた。東からあがってブリブシあがったら・・・時間おそい。仕事行って家へ帰る時間。この星めあてに帰る。

イカ:夜。月関係ない。旧7月、8月くらい。ブリブシ見えた。

ブリブシ、東からあがってくる。ブリブシあがってきたから帰ろうよ。(宮地竹史氏同行)

●与那国町久部良、昭和15年生まれの話者(比川出身、13歳のとき、久部良に来た)の話

ブリブシ かたまっている。ここの人が言っていた。

(与那国方言辞典編纂室、上地艶子氏の案内)

### 八重山諸島の諸島のプレアデス星団についての全体的特徴・傾向及び課題

八重山諸島のプレアデス星団の名前には、不思議なことに星名の多様性がない。また、フシ、ブシ…というように星を加えて呼んでいた。南西諸島以外においては、プレアデス星団の星名は次のように実に豊かな多様性があり、また、ホシ、ボシ(星)を加えていないケースも多い。加える場合も、サン、サマと親しみを持って呼ぶ。

例 スマル、マツア、ムツレンジュ、タマカザリ、オクサ、ムジナ、ムヅラ、ムツナリサン等

八重山では、スマル、スバルの系列の星名は記録できない。宮古島においても記録できていない。しかしながら、宮古島には、基層文化のなかの「すまる」に通ずる記述が残っている。『宮古島旧記並史歌集解』に掲載されている「金志川金盛があやご」に「ゆばらかぎ、すまりよ」とある。この「すまり」が日本の古語の「すまる」である。現在も宮古島では「すまる」を束ねる意に使われているとあるが、星名は「すまる」でなく、ンミブス(群れ星)であった。この古語の「すまる」は、現時点では八重山においては記録できておらず、八重山諸島での分布については今後の調査研究課題である。

なお、この古語「すまる」の存在は、拙著『日本の星名事典』において記した古事記に登場する古代の玉飾り「美須麻流之珠((みすまるのたま)」を星のスマルとすることに対する疑問の補強となった。宮古島で星の名前として「すまる」にならなかったことは、古事記の時代の「みすまる」は星を意味していたと安易に断定してはいけないことになるからである。

## 2 オリオン座

### 調査成果の概要

南西諸島には、次のような2つのグループの星名が伝えられている。

- ・三つ星のグループ(オリオン座  $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$ )
- ・梟のグループ(三つ星と小三つ星と  $\eta$  星でつくる配列)

八重山諸島においては、柵のグループの星名は現時点で記録されていない。しかし、オリオンの星列を見て、小三つ星と $\eta$ 星を含んだ配列を認識し、星名形成された事例が八重山諸島に分布していないと断定するには調査のデータは不足している。

#### (1) 石垣島

- ・石垣市登野城…タツアギ(三つ星。立つように上がってくる) (正木譲氏による)
- ・石垣市白保…ウシウマサフケ(上から牛、人、馬と思う。秋に見える) (秋のことをスサナ(小さいナ)ツ白い夏という意味) (石垣繁氏による)

#### (2) 鳩間島

- ・沖縄県八重山郡竹富町鳩間島…ミイチプシ(北尾 AC)

#### (3) 与那国島

- ・与那国町祖納…ミチブシ、ミツブシ(クガネミツブシも聞いたことがあるが、オリオン三つ星かどうかははっきりとしなかった) (2020年1月25日現地調査)

### 3. 北極星(こぐま座 $\alpha$ 星)

#### 調査成果の概要

#### (1) 石垣島

- ・石垣市新栄町…ニーヌブア

#### (2) 西表島

- ・八重山郡竹富町西表…ニヌハブシ(子の方星) (北尾AC)

#### (3) 黒島

- ・八重山郡竹富町黒島…ニヌファブシ(話者2名、それぞれ「ななつある」「ひしゃくのほし」というように北斗七星として認知していた。北斗七星のひとつがニヌファブシである、あるいは、北斗七星とニヌファブシは同じであると認知するケースは、南西諸島以外においても見られる。単に記憶違い、混乱ではなく、そのような認知である可能性がある)

#### (4) 鳩間島

- ・八重山郡竹富町鳩間島…ニヌパプシ(子の方星)

「ユウルパラス、フニヤ、ニヌパプシ、ミアテ、バンナセル、ウヤヤ、バンド、ミアテ」(夜走らす船は、北極星を目標にして走らす。私を生んだ親は、私を目当て) (北尾AC)

#### (5) 小浜島

- ・八重山郡竹富町小浜島…ニヌワブチ(子の方星)

子の方星を「ニヌワ」と呼んでニヌワブチ。沖縄県八重山郡竹富町小浜島に伝えられている。「夜ハラスフニヤニヌワブチミアティ、ワンナセルウヤヤワントミアティ」と歌われている。(北尾AC)

#### (6) 新城島

- ・八重山郡竹富町新城島…ニヌパプシ(子の方星) (北尾AC)

#### (7) 与那国島

- ・八重山郡与那国町…ニヌハフシ(子の方星) (北尾AC)

「ユルハラス、フニヤ、ニヌハフシ、ミアティ、ワンナチヤル、ウヤヤ、バンド、ミアティ」(夜、航海する船は、北極星が目当てである。私を生んだ親は、私を目当てに生きている)

### 4 北斗七星

#### 調査成果の概要

##### (1) 鳩間島

- ・八重山郡竹富町鳩間島…フダルプシ(北尾AC)

(フダルとは柄杓のこと。水汲み柄杓に似ている)

##### (2) 小浜島

- ・八重山郡竹富町小浜島…ニシナナチブチ(北七つ星) (北尾AC)

(北を「ニシ」と呼ぶ。ニシナナチブチは「北七つ星」という意味)

##### (3) 与那国島

- 八重山郡与那国町…ニチナナチ(北七つ)

(「ニチ」とは北のこと。ニチナナチは「北七つ」という意味)

## 5 宵の明星

### 調査成果の概要

#### (1) 竹富島

・八重山郡竹富町竹富…シカマブシ(仕事星)

(1979年3月、竹富島の上勢頭亨氏より、シカマブシ(仕事星)は宵の明星であり、人頭税時代、夕方、シカマブシの光で農業をしたと聞く)

上勢頭亨氏は、『竹富島誌』において、「シカマ星…日没後西方に三時間ほど大きく光る星」(上勢頭 1976)と述べている。さらに、上勢頭氏は、『沖縄・聞き書きの旅』において、「みーんな貢納用に働いて、自分たちの食べる畑をやるひまがないから、太陽が落ちて夜になって、星の光るところになると自分たちの食べるいもなどを作ったよ。その時、一番光って明るいのが宵の明星だったから、シカマブシ(仕事星)と呼ぶんだよ。一時間ほど光るから、その間に仕事をしなければならない」と述べている。(下嶋 1980) 太陽が明るいうちは、人頭税のために粟や豆を作る。竹富島では、米が取れなかったので、米作りは船に乗って西表島まで行った。シカマブシが入ってしまうと真っ暗になる。タバコの根っこに肥やしをやろうと、「ああ、これはタバコの根っこなんだと…」と左手で根っこを掴んで右手で肥やしをかける。仕事星を思い、星空の下で得たタバコの収入で子どもを養ったのだった。(下嶋 1980) なお、野尻氏の記述、筆者の記録では、シカマブシであるが、ここでは、シカマブシとなっている。上勢頭氏によると、普通ブシと濁らずにフシであるが、実際は、話者によって、あるいは同じ話者でも話の中で、フシとブシを両方使う場合もある。

#### (2) 鳩間島

・沖縄県八重山郡竹富町鳩間…ダイケノアーヤブシ(北尾AC)

「大工(ダイケ)」は人の名前、「アーヤ」は父親。大工という人が、日が暮れてこの星が明るくなるまで畑仕事をして帰ったことから「大工のアーヤブシ」と言った。

#### (3) 小浜島

・沖縄県八重山郡竹富町小浜島…サカマプチ(北尾AC)

サカマは「仕事」、プチは「星」。「夕方仕事をしているときに見える星です。天気の良い日は、サカマプチの光の見えるまで野良仕事をやって帰るのが普通です」

#### (4) 波照間島

・八重山郡竹富町波照間島…ブーニヌブヤヌプスイ(新城 2018)

「ブーニ」は屋号、「ブヤ」は爺さんで、大嶺の爺さんの星という意味となる。新城勝氏は、「大嶺の爺さんは誰よりも遅くまで仕事をして星空の下で帰宅したので、夕方の明るい星をそう呼んだのだという。どうやら大嶺の爺さんは星に詳しい方で、季節を見極めるために星空を観測しながら帰ったのではないかとされている」と記している。(新城 2018)

波照間港で出会った昭和31年生まれの漁師も、「ブーニヌブヤヌプスイの「ブーニ」は屋号、「ブヤ」は爺さんという意味でいちばんさいしょに見える星」と伝えていた。(北尾C)

## (5) 与那国島

### ・八重山郡与那国町…ユダチ(北尾C)

「宵の明星、ユダチ。あの星あがったら、見えたら日が暮れるよーというのをタチ。ユー(夜)を知らせる星。ユダチ、夜(ユ)が立つすなわち夜になる。ユダチ、明るい。ユダチ、明るい星。シカマブチみたいな」

「宇良部岳の上にユダチが見えれば若い人が亡くなる。宇良部岳、祖納から南。ティンダバナの上は言わない。宇良部岳の上に見える星。光って見えたら不安。いつもの星より輝いて見える」

若い人が亡くなるのはティンダバナではなく、宇良部岳であった。宇良部岳は祖納から南～南南東である。この場合は、木星やシリウスであろうか。ユダチとは金星に限らず、夕方に見える明るい星を意味するのであろうか。

ユダチ(宵の明星)には、「帰る準備をしなさい」という意味と「まだ仕事を続けなさい」というふたつの意味があった。

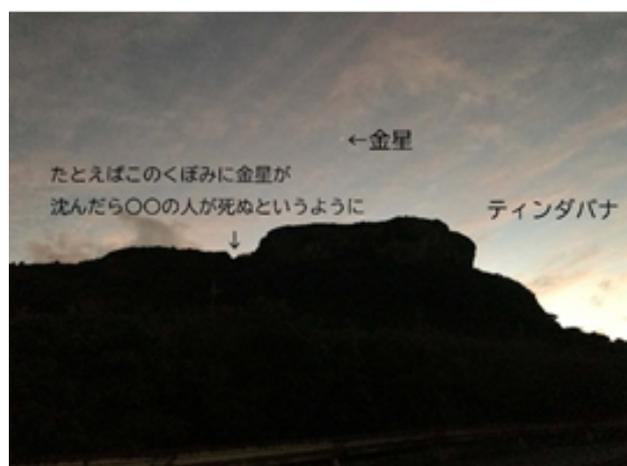
### ・八重山郡与那国町…シカマブチ(北尾C)

#### 与那国町久部良の昭和15年生まれの漁師さんの話

星の話からではなく、16歳から船に乗ったころの話聞く。石油ランプだった。旧暦7月、8月、サバニで、父親と夕方5時頃行って、8時か9時に帰った。あかりにイカが寄ってきた。

宵の明星のことは、シカマブチと呼んだ。シカマブチ、その星沈むまで仕事やった。シカマブチ、この星沈むまで仕事やらんとあかんと、昔のじっちゃん、ばっちゃんに教えられた。

与那国町祖納の昭和8年生まれの場合、「ティンダバナの上で星がピカピカしている。あれがシカマブチ。えらい人亡くなるというのは、たまに聞きますけどね」と語った。



## 6 明けの明星

### 調査成果の概要

#### (1) 鳩間島

・八重山郡竹富町鳩間島…アカシキンブシ(北尾AC)

#### (2) 小浜島

・八重山郡竹富町小浜島…アカチキブチ(北尾AC)

#### (3) 新城島

・八重山郡竹富町新城島…ハールブシ(北尾AC)

(「ハール」とは明るいこと。夜明けに出て明るい星をハールブシと呼んだ。)

#### (4) 与那国島

・八重山郡与那国町…シカマブチ(仕事星)(北尾C)

仕事星は、明けの明星を意味することもあった。

「シカマブチ、金星のこと。朝方、シカマブチ、シカマブシ」

「シカマブチ、あがっている。早く仕事行きなさい」と、朝は言われた。「シカマブチ(仕事星が)、アカンドウ(あがったよ)、タイグ(はやく)、シカマンキ(仕事いき)」と。

(与那国町久部良では、宵の明星を意味していたケースもあった)

・八重山郡与那国町久部良…ドゥアギルフチ(北尾C)

昭和15年生まれの話者の話

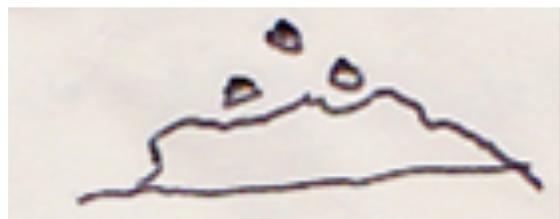
「ドゥ(夜)アギル(あける)フチ(星)(夜明け星という意味)」

## 7 みなみじゅうじ座

### 調査成果の概要

八重山郡竹富町鳩間島からは、みなみじゅうじ座の $\alpha$ 星が西表島に隠れて見ることができない。その様子を、伝承者は図のように描いて送ってくれた。

鳩間島では、 $\beta$   $\delta$   $\gamma$ の三星をシマヌパプシと呼んでいた。そして、シマヌパプシの両サイドの



二つの星( $\beta \delta$ )が水平になるとカキノ(米刈)バンジン(最中)と伝えられていた。5~6月の稲刈の季節の日没後にシヌヌバプシを見ることができる。(北尾AC)(1984年2月実施のアンケート調査による。話者年齢79歳(当時))

これに関連して、パイガブス(ケンタウルス座  $\alpha \beta$ )を稲刈の時期に見たケースがある。1962年の乾幸之助氏から野尻抱影氏への便りには、パイガブスについて、「この南の空に低く出る二つの大星がマキタ(平行線)になると、稲刈の時期との事でした。八重山の稲刈は六~七月の候ですから、明らかにケンタウルスだと思います」と記している。(野尻 1973)

もちろん、地域や話者によって、目標とする星が異なるケースはある。特筆すべきことに、みなみじゅうじ座の場合は十二支の午を用いて午の方星、ケンタウルス座  $\alpha \beta$  の場合は、琉球方言の南であるパイを用いてパイガブスである。こぐま座  $\alpha$  星(北極星)を十二支の「子の方星」、北斗七星を琉球方言のニシを用いてニシナナツンプシと呼ぶのに通ずる。

ところで、午の方星は、地域や話者によって、みなみじゅうじ座以外を意味する。

北尾は、一九七九年三月、沖縄県八重山郡竹富町竹富島の上勢頭亨さんから、「ウマノファが隠れるように、雨だれ(庇)を下げたら台風が来ても安心」と聞いた。高度五度~六度くらいのケンタウルス座  $\alpha \beta$ 、みなみじゅうじ座  $\beta \delta$  よりも高度の高い星を意味した。

西表島では、「この星『んまぬはぶし』は南方を示しているので出漁の場合は最も重要となっている」と伝えられている。(北尾AC)(1984年3月実施。話者年齢73歳(当時)) この場合も南十字を意味していると断定できない。

また、八重山郡竹富町波照間島において、昭和31年生まれの漁師より「ペーブスイ」を記録した。ペーブスイのペーは南で、南の星という意味である。話者は南十字と伝えていたが、南十字が南に見えるという後に得た知識が影響した可能性を疑う。

回答からひとつの星を意味するかどうか、あるいはケンタウルス  $\alpha \beta$ 、あるいは南十字を意味したかは不明である。そもそも、南十字の配列を見て認知し、星名形成したかどうか。そのようなパターン認識は後に南十字の知識が新聞、ラジオ等から入ってからの影響ではないか? それらについては、南西諸島全体での議論を行ないたい。

## 8 ウヤキブシ

### (1) 文献のなかのウヤキブシ

喜舎場永珣氏著『八重山民謡誌』のチンダラ節にウヤキ星が掲載されている。チンダラの意味について、喜舎場氏は、「可哀相だ、ふびんだ、同情に堪えぬ意」と記している。

1732年、琉球王庁の命令で黒島から石垣島野底に強制移住させられ、黒島で永遠にともに生きるはずであった二人の恋人は引き離されてしまった。野底に移住させられたのはマーペーという女性であり、その切なさを次のように星に歌う。

「トウバラマトウ バントウヤ カヌシヤマトウ クリトウヤ」

(トノハラ 殿原 (恋男) と ウタシ 妾 とは カヌシヤマ 可愛乙女 (恋女) と これとは)

「イミシヤカラ 遊ビトウラ クユサカラ ムチィリトウラ」

(幼少の時から 遊び仲間であった 子どもの頃から 纏れ友達であった) (1)

「天 (テイ<sup>ン</sup>) カラス ピキ<sup>ィ</sup>ミヨウル ウヤキ星 (プシ<sup>ィ</sup>) デ イソカヤ」

(天に輝く星に 例を引いてみると ウヤキ星 (牽牛星、織女星) という二星は)

「ナラブレバ 定<sup>サダ</sup>メヨウリ イカユンデドゥ シィカ<sup>ィ</sup>リル」

((七夕の夜)並んで合うと定められている 行逢うとの 伝承があるが)

「トウバラマトウ バントウヤ フレハダミ イカイミユナ」

(殿原と 妾<sup>トノハラ ヲタシ</sup>とは (強制移住後) 肌身を触れたことなく行合ったこともなかった) (喜舎場 1967)

## (2) 調査成果の概要

ウヤキ星について、喜舎場氏は織女と牽牛と記していた。しかし、宮古島で記録したのは、次のように南十字のケースと明けの明星のケースであった。

### 事例1 南十字

#### ●ウヤキブス

沖縄県平良市宇松原 (現・宮古島市) に伝えられている。ウヤキは「金持ち」、ブスは「星」で、金持ちの星という意味である。(北尾AC)

### 事例2 明けの明星

#### ●ウヤキブス

宮古島市松原にて、昭和14年生まれの話者より聞き取り調査。(宮地竹史氏同行)

「おやじがウヤキブスに夜明け手をあわしていた。ウヤキブスといって夜明けに手をあわして。あやじなんかやっていた。ウマノファブスとウヤキブスはいっしょ」

朝早くひとつ光っている星がウヤキブスであり、ウヤキブスは南十字を意味しなかった。しかし、ウマノファとウヤキブスが同じという点は事例1と共通していた。

石垣市野底において、聞き取り調査を実施したが、次のように、黒島出身者はいなくなってしまった。

### 事例1 畑仕事をしていたAさん (昭和20年生まれ)

宮古島から9歳のときに移住したため伝承を伝えておいなかった。

(写真は、畑仕事をしていたAさんに聞く筆者。右のとんがった山が野底マーペー。宮地竹史氏撮影)。



## 事例2 チンダラ節を毎年歌うイベントを実施しているBさん(昭和29年生まれ)

ウヤキ星について尋ねると、ウヤキ星のことははじめて知ったという答えがかえってきた。長い歌で、ウヤキ星のところまで歌ってなかった。Bさんは多良間島出身で、子どもの頃、黒島の人か黒島と関連のあるおばあさんが残っていたものの、現在は野底に黒島出身の人はいなかったと判明。

### (4) 黒島において記録した関連伝承

黒島から野底に来た人はどこに行ったのであろうか。沖縄本島あるいは東京や大阪等に移住したのであろうか。

八重山郡竹富町黒島保里の現地調査(2020年3月23日実施、通事安夫氏の案内)で、昭和10年生まれの話者により次のように記録したもののウヤキ星は記憶していなかった。

「野底マーペ(マーフェと聞こえる)に出てくるハニムイ(カニムイと言うより、ハニムイ、ハネムイと聞こえた)とあだ名をつけられたひいじいさんが宮里にいた。マーペは、彼氏(カニムイ)を思い石になった。その彼氏の名前ハネムイでよばれていた」

### (5) 異なる星を認知して同じ星名が形成されるケースについての考察

ウヤキ星が南十字というアンケート調査記録だけでは心配なので複数の伝承資料を集めようと思ったが、「南十字」「織女と牽牛」「明けの明星」の3つの候補が出てしまい、ますます謎が深まった。

複数の伝承資料がないので、絶対に正しいとも、また、間違っているとも言えない。

ただ、ひとつ言えることは、異なる星の配列を認知して同じ星名が形成されている次のような事例があるということである。

#### 事例1 サカマス、サカヤノマス、ヨコゼキ

多くは、オリオン座三つ星と小三つ星と $\eta$ 星で構成される配列を認知して形成された星名であるが、北斗七星を意味するケースもある。

#### 事例2 ムヅラ

多くはプレアデス星団を意味する六連星(ムヅラ)が、宮城県、岩手県においてオリオン座三つ星(小三つ星を含めるケースもある)を意味する。

### 事例3 オオボシ

シリウス、明けの明星、北極星(こぐま座 $\alpha$ )を意味するケースがある。

### 事例4 アカボシ

アルデバラン、アンタレス、明けの明星を意味するケースがある。

また、伝承には、形成された地において消滅しても移住先で伝わっているケースがある。

### 事例1 能登星

能登星(カペラの和名)は、能登半島が見えない北海道で伝え語られている。積丹半島からのぼるカペラを積丹星と呼ばずに能登星と呼んでいる。

### 事例2 七夕のローソクもらい

新潟や東北で七夕のローソクもらいが消えても北海道では今日においても変容を続けながら広く行なわれている。

したがって、ウヤキ星の真相は、沖縄本島あるいは、他の移住先(東京、神奈川、大阪等)で見つかる可能性がないとは言えない。

## 9. 波照間島の星水アユについての考察

八重山郡竹富町波照間島には、プレアデス星団を見ることができない期間について、次のような「星水(プスイミジイ)アユ」という古謡が伝えられている。

「星水ヌヨイ ヌドゥンヤヨイ 四月ヌ イリユドゥンドウ」(喜舎場 1970)

「星(プシイ)」とは、プレアデス星団(ムルブシ)、「ユドゥン(淀ン)」とは、梅雨のこと。プレアデス星団は、陰暦四月八日から1週間は西に沈んで見ることができないが、1週間後の明け方の東の空に現れるのを歌ったのである。

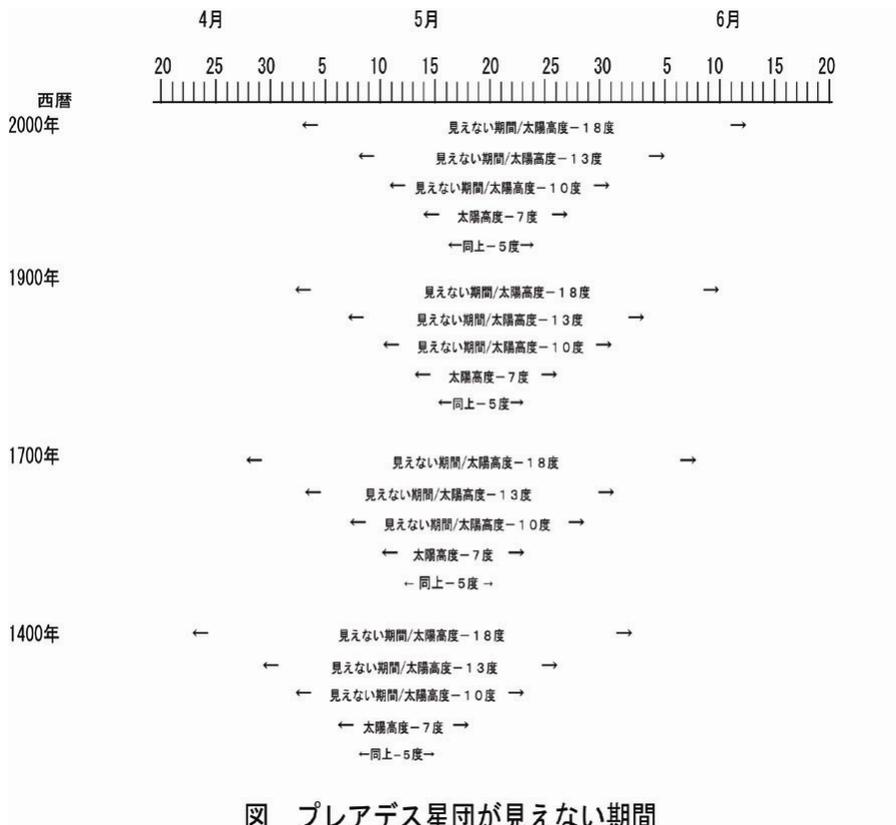
実際に1週間後に会えることが可能かどうか、日の入り後、日の出前太陽高度 $-18 \sim -15$ 度について考えた。(図参照) その結果、日の出前、日の入り後 $-5$ 度の場合においても、ほぼ10日後となり1週間では無理であることが判明した。また、実際は透明度がよくても $-5$ 度ではプレアデス星団を見ることは不可能であり、仮に太陽高度 $-10$ 度とすると、見ることができない期間は、1900年、1700年、1400年で約22日となる。(長谷川 2002)

実際は1週間後に会えないものの、プレアデス星団との別れと出会いを観察して歌うことに、一日も長くプレアデス星団とともにいたいという人と星とのかかわりの原点に通じる思いを見出すことができる。

ところで、西に沈んで見えなくなったプレアデス星団の雨がアヨウ岳の頂上から降ってくると歌われている。

「アヨウ岳ヌヨイ 上カラヨイ 星水ドゥ アリワルソナ」

アヨウ岳が波照間にあるはずであると新城さんに尋ねると、「アヨウ岳、聞いたことないなあ。森のことを意味するのかなあ」という答えが返ってきた。後にアヨウ岳について年配の人に確認してくれたが、八重山には存在しない地名であった。



## 9 波照間のユツアスブスイについての考察

(1)「ひーすくり・じらば」で歌われる「ユツアスブスイ」という星

『竹富町古謡集』に掲載されている「ひーすくり・じらば」に、次のように「ユツアスブスイ」という星が登場する。(玉城 2000)

ひーすくり・じらば

その一 ゆつあし井・じらば

原歌

訳

ゆつあし井てそー

四辺形星を

やーなうーばし

元にして

やーばちくーり

家を造った

あんちよー

そうな

ウリヤミョーナチャ

囃子

(それは 冥加なことよ)

家作り(ひーすくり)のときに歌われたゆつあし井(ユツアスブスイ)とは、どの星を意味するのだろうか。

新城勝氏は、「波照間島の島立て伝承「アバアミ(油雨)」の中にユツアスブスイの名が出てくる。ユツアスとは「四角」の意味で、おそらくニシナナツ(北斗七星)の升の部分ではないかと思われる」(新城2018)と記している。

## (2) ユツアスブスイを見て建てた家

宮良高弘氏は、波照間島創世の伝説について、「あるとき、突如としてアバーミ(ママ)(新城勝氏によると、波照間島では、油雨は、正確にはアバーミでなくアバアミと呼ぶ)(油雨)が降り島の生きものは、尽く死滅した。しかし、そのとき幸いにも二人の兄妹がミンクヌガマ(ミシクー地名一の洞窟)に隠れ、その災難をのがれて生き残った。その後二人は、海岸近くのこの洞窟で暮らしていたが、成人して夫婦となった。しばらくするうちに初子が生まれたが、その子は、ボーズという魚のような子であった。このような子が生れるのは、土地柄がよくないためだろうと二人は考え、ミシクの上に移り住んだ」(宮良 1972)と記している。

ところが、『南西諸島の神観念』によると、次に生まれたのは百足であった。そして、つづけて、「二人はこのあとまた『<sup>ユツアス</sup>四つ指す』という星座をモデルにして四つの角に柱を建て、さらに真中にも一柱建てて、最初の屋敷、つまり初めてのトゥニムトゥ…」(住谷・クライナー1977)と記されている。

新城勝氏は、そのユツアスブスイを見て家を建てたと伝えられている場所を案内してくれた。はじめて、人間の女の子が生まれたという場所である。

(写真右 左、新城勝氏、右、北尾、通事安夫氏撮影)



最初に家を建てたとき、この地で見たユツアスブスイは、天の真上を通るペガサスの四辺形だろうか。あるいは真東からのぼるオリオンだろうか。新城氏は、それらの可能性もあるでしょうと言われた。星見様の記述も併せて考えなければならない。

## (4) 多良間のにーりに登場する「ユシヤスミヤ」との関連で考察

多良間のにーり「与那覇せど豊見親のにーりに」に「ユシヤスミヤ」が次のように登場する。  
「ゆしやすみやーや、きんたてい、うりがあとからや」(稲村 1962)

「ひーすくり・じらば」に登場するユツアスブスイに通ずる。

稲村賢敷氏によると、<sup>とが</sup>與那覇勢頭豊親見の「にーり」は、元は沖縄本島においても広く歌われていたようであるが、今は多良間島の栗摺り歌として残っているとある。そして、神前に歌われたものとは思われない軽快な曲節であり、初めから労働歌として一般に歌われたものであろうと記している。(稲村 1962)

また、稲村賢敷氏は、『ゆしやすみゃ』はペガス星座(ママ)のこと、『ゆしやす』は島語で屋敷のこと、ペガス星座の四つ星を指す、『きんたて』は四隅の柱を立て、家建をすること、即ちペガス星座の四ツ星を見て、その後からはの意」と記している。(稲村 1962)

(北尾注: ペガサスの四辺形と言うと厳密には違う。ひとつの星はアンドロメダ座  $\alpha$  星である。拙著『日本の星名事典』では、ペガサス座  $\beta$ 、 $\alpha$ 、 $\gamma$  とアンドロメダ座  $\alpha$  で構成する秋の四辺形と記した。しかし、ここでは稲村氏の著書のママとした。本稿では、略して「秋の四辺形」と記す。)

ユツァスブスイの「ユツァス」は「四角」の意味であったので、「ユシヤス」も「四角」かと思えば、稲村氏は「屋敷」と記している。そして、秋の四辺形を見て四隅の柱を立てて家を建てたというのは、前述の波照間島の「ひーすくり・じらば」の「ゆつあしキてそー やーなうーばし やーばちくーり あんちよー」(四辺形星を元にして家を造ったそうなの)に通ずる。ただ、稲村氏がペガス星座(ママ)と記していることが気になった。

「多良間島のにーり」に、ユシヤスマヤに続いてのぼる星について、次のように記されている。  
「んみ星<sup>ブス</sup>はあがらし うりがあとからや」

んみ星は、群れ星が変化したものである。北尾もアンケート調査により、宮古島にてンムブスを記録している。(北尾 1984)

群れ星は、プレアデス星団を意味するケースと特定の星ではなくたくさんある星を意味するケースがある。しかし、この場合はのぼる星を順に歌っており、プレアデス星団を意味すると考える。ペガサス座  $\gamma$  の約 3 時間 15 分後にプレアデス星団がのぼる。その様子が次に歌われている。

「ゆしやすみゃーや、きんたてい、うりがあとからや」(秋の四辺形を見て家を建て、そのあとから)  
「んみ星(ブス)ばあがらし うりがあとからや」(群れ星があがり、そのあとから)

さらに、続いて、「むい星」「たーきゆみゃ」、そして、最後は明けの明星「うぶらくーら」まで星の出を歌っている。

家を建てることと 4 個の星で構成する星列「ユシヤスマヤ」と「ユツァスブスイ」、多良間の星見様(高木・星加 1980a)(高木・星加 1980b)と波照間の星見様(黒島 1999)の共通点、多良間と波照間を結ぶものは何だろうか。

そして、波照間の「ユツァスブスイ」が秋の四辺形である可能性は？ どちらかと言えば目立ちにくい点が気になるが、波照間のユツァスブスイも秋の四辺形である可能性は充分ある。

新城勝氏に稲村氏の多良間の記述にペガサスとあることについて尋ねてみると、波照間の場合も、「やはり秋の大四辺形ですかね。北斗七星と同じくニューファブスイ(子方星＝北極星)が見つけられるし、秋の四辺形の方が四角形が常に北極星を背にしていますからね。因みに秋の四辺形の 1 つはアンドロメダ座の頭なので、私は「秋の大四辺形」と呼ぶ事にしています。長年の疑問が少し晴れた気がします」と感想を述べてくれた。

「秋の四辺形の方が四角形が常に北極星を背にしていますから」という指摘は私も同感だ。秋の四辺形である可能性を補強するものと思う。

## 10 星を認知する過程において、地域の人と結びつけ星名形成に至ったケースについての考察

星を認知して、数で記録したのがオリオン三つ星や北斗七星であった。群れているという特徴に基づいたのが群れ星であった。それらの特徴の認知にもとづく星名形成だけではなく、地域の人が星名となったケースがある。

八重山諸島の調査において、次のような事例を記録した。

### 事例1 ダイケノアーヤプシ

沖縄県八重山郡竹富町鳩間にて記録。(北尾AC)

日が暮れて宵の明星が明るく輝くようになるまで畑仕事をして帰った「大工(ダイケ)」という人が星名となった。「アーヤ」は父親という意味である。

### 事例2 ブーニヌブヤヌプスイ

波照間港で昭和31年生まれの若い話者が伝えていたように、広く地域で呼ばれている星名である。ブーニヌブヤヌプスイの「ブーニ」は屋号、「ブヤ」は爺さんで、大嶺の爺さんの星という意味となる。新城勝氏は、「大嶺の爺さんは誰よりも遅くまで仕事をして星空の下で帰宅したので、夕方の明るい星をそう呼んだのだという。どうやら大嶺の爺さんは星に詳しい方で、季節を見極めるために星空を観測しながら帰ったのではないかといわれている」と記している。

(新城2018)



(大嶺家の前にて 右 通事安夫氏、左 北尾、新城勝氏撮影)

なお、新城勝氏によると、ブーニヌブヤヌプスイとともに、宵の明星を意味する星名として、スカマップスイとヘーダマップスイが伝えられている。宵の明星は、多くの場合、金星であるが、場合によっては金星に匹敵する木星等のケースもある。また、見える方角も常に西と記憶しているのではなく、東のこともあった。

## 11 地域の人と結びつけた星名形成から、星の認知と星名形成における地域性の議論への発展

日々の暮らしと、明るさや配列に特徴がある星を重ね合わせた。そして、生活用具、衣食住のなかでの様々な営み等を描いた。だから、星名は、日々繰り返される「食べる、飲む(食生活)」「身につける(衣生活)」「住む(住生活)」「遊ぶ」「祈る(信仰)」「生産する(つくる、とる)(農業・漁業・製糸および機織り・山樵・狩猟等の生業)」「地域の生活者」などの暮らしの様々な場面としっかりと結びついていった。例えば、波照間島に伝えられているブーニヌブヤヌプスイは、大嶺の爺さんが、「誰よりも遅くまで仕事をして星空の下を帰宅した」「季節を見極めるために星を観測しながら帰った」ことから、夕方の明るい星の名前の形成がなされたのである。

地域の人と星が結びついたケースは、次のように八重山諸島以外に広く分布する。

・デンクロウボシ(新潟県糸魚川市筒石)

オリオン座三つ星。筒石の屋号にもとづく星名。

・ケンキチボシ(鹿児島県出水郡長島町獅子島弊串)

宵の明星。夕方暗くなって宵の明星が出るまで働くケンキチという天草から来た人にもとづく星名。天草から来たのは昭和10～11年からであり、比較的新しく形成された星名。2004年11月、昭和3年生まれの話者から聞いた話である。

「ケンキチというのは、私たちの小学校時代から17、8くらいにいた人。その人ががんばりする人間。きばる人間、その人の名前をとってケンキチボシ。ケンキチは星の出るまで働く。ケンキチボシは夕方暗くならないと見えない。夕方暗くなって見えるときまできばった」

「ケンキチさんが天草から来て、前島を買って、弊串の個人の人が持っていたのを、ケンキチさんが買って、そこに住んで、山の手入れをした。杉とか檜の木の手入れをした。山仕事がんばって、夕方、ケンキチボシが出るまで手入れしていたので、かすらも切ってなかった」

・ゼンタロウボシ(愛媛県西宇和郡三崎町(現 伊方町))

宵の明星。ゼンタロウという人が宵の明星の出るまで仕事をしていたことから、ゼンタロウボシと呼んだ。「ゼンタロウボシというのがあった。その星が出るまで山におった。仕事していた」(1983年10月、76歳のおばあさんから聞いた話)

・デンゾウボシ(鹿児島県川辺郡坊津町坊(現 南さつま市))

明けの明星。デンゾウという昔の漁師が星の名前になった。

「デンゾウという人がいて、金星と間違えて木星を見て金星と言った。それで金星をデンゾウボシと言った」(1980年1月、明治43年生まれの漁師さんから聞いた話)

・サンニヨンボシ(鹿児島県川邊郡枕崎町西村(現 枕崎市))

宵の明星。洒好きの人の名前サンニヨンにもとづく。

「日没後に出て午後九時頃かくれる一箇の大星を云ふ。昔サンニヨンという者が頗る洒好きで、常に日が暮れると飲みだし、この星の没する九時頃には漸く止めたので、人が名付けてこれをサンニヨン星と云ふ」(内田 1949)

・サンリンボシ(鹿児島県川邊郡枕崎町枕崎(現 枕崎市))

明けの明星。夜が明けるまで酒を飲んだ人の名前サンリンにもとづく。

「昔サンリンと云ふ人が夜中酒を飲んでみて、夜が明けこの星が出たので逃げ歸つた」(内田 1949)

・ミキョウボウスブシ(三京坊主星)(鹿児島県大島郡徳之島町)

明けの明星。高僧の名前にもとづく。

「その昔、三京(みきょう)というところに住んでいた高僧三京坊主様が死んだとき、その目玉が天に上がって星になったからだという。三京という場所は徳之島の中央部山間に位置する小集落で、古く三京坊主ガナシという高僧が住んでいたという伝承がある。いまでも立派な座禅を組んだ石像が残っている」(徳之島の松山光秀氏よりの手紙(1987年)による)

## ②地域を越えて活躍した有名人

・トクゾウボシ(徳蔵星)(大阪府泉佐野市)

北極星(こぐま座 $\alpha$ 星)。北極星の動きを発見する物語に登場する名船頭「徳蔵」にもとづく。(北尾 2001)

・オナガワボシ(小野川星)(静岡県榛原郡相良町地代(現 牧之原市))

さそり座 $\mu^1\mu^2$ 。相撲の名力士小野川にもとづく。(内田 1949)

・ゴロージュロー(五郎十郎)(静岡県榛原郡相良町地代(現 牧之原市)、小笠郡相草村赤土(現 菊川市))

さそり座 $\lambda\upsilon$ 。曾我兄弟の兄、曾我十郎(曾我祐成)、弟、曾我五郎(曾我時致)にもとづく。(内田 1949)

・ソガボシ(曾我星、静岡県榛原郡御前崎村大山(現 御前崎市))

さそり座 $\zeta^1\zeta^2$ 。曾我兄弟にもとづく。(内田 1949)

・サイゴウボシ(西郷星)

大接近の火星が鹿児島島の乱(西南戦争)に結びついた。火星の中に西郷隆盛がいると信じたことにもとづく。(野尻 1973)

・キリノボシ(桐野星)

大接近の火星と近づいたり遠ざかったりした土星。桐野利秋(西郷隆盛とともに西南戦争で戦い戦死)にもとづく。(野尻 1973)

星の認知は、地域の暮らしのなかで行なわれるものである。数や明るさ、方位にもとづく地域性のない認知による星名形成とともに、地域の暮らしのなかで接する地域の人が星名として形成される。全国的に知られた人が地域において星名形成されることがあるが、その場合も全国的に分布するのではなく限られた地域にのみ分布する。

## 12 星見石についての課題

『八重山文化論集』に星見石のことが書かれているのを知って、著者の石垣繁氏に案内してもらったのが旧石垣村の星見石であった。(写真、1979年3月撮影)

もうひとつの星見石との出会いは竹富島だった。赤山公園に星見石が設置されていた。方角を測定したりしたが、群れ星を観察できるように設置されていなかった。

上勢頭亨氏は、星見石は、北岬の小高い丘にあったと教えてくれた。日没後、星見石の下の方にあけられている穴(直径は、西側が約13センチ、東側が約22センチ)から、群れ星(ムリカブシ)が見える時季に播種を行なった。ちょうど薄明の終わり頃に穴から群れ星が見えた時季—立冬の頃だった。(写真 1979年3月撮影)

その後、宮地竹史氏の調査で竹富島北部の與那国家の畑にあったことが判明した。また、野尻抱影氏著『日本星名辞典』初版に「川平の星見石」として掲載されているのは、実は竹富島の星見石であることがわかった。(宮地 2009)



旧石垣村の星見石



竹富島の星見石（東側から撮影）



（西側から撮影）

星見石を用いてどのようにして観測していたのだろうか。竹富島だけ穴から観察したのだろうか。星空に向かってそびえる石は、人びとが星をめあてに星を支えにして生きていた時代のことを物語っていた。ほんとうに星見石というのは、八重山以外にないのだろうか。

また、星見石を用いて農耕の季節を知ることは方法のひとつに過ぎなかったのではなかろうか。星見石を用いないで判断した事例が多く、あえて石を使う必要はあるのだろうか。石を使うのは、むしろシンボリックなもの、信仰に結び付く要素があったからという可能性はないだろうか。

星見石が八重山だけに設置されているはずはないと調査地では似た立石がないか気にかけていた。宮古島荷川取の人頭税石、城辺の鬼の杵・神の杵という八重山の星見石に似ている立石について、黒島為一氏の研究(黒島 1989)をさらに発展させていく必要を感じた。そもそも星見石をプレアデス星団との関連だけで論じては本質を見失う危険性がある。目的は、プレアデス星団等を目標にするための星見石として論じるとともに、立石を空に向かって設置されているシンボルとして捉え、それが後の時代に、鬼の杵・神の杵や人頭税や星見石が加わった可能性があり、もとは何かのシンボル、コスモロジーというか世界観、自然観、ことばを変えれば、宇宙に対する情念、包括的な認知の表現までさかのぼることを今後の研究課題としたい。

(写真右、宮古島の神の杵、一度移動したもののユタの進言で元に戻した。星見石を意味するかどうかについては疑問でもあり、空へ向かって立石が何を伝え表現しているかは今後の課題である)



### 13 語り伝えなければならない八重山のもうひとつの南が星伝説—伝承の力としての残酷性

伝承には、残酷な部分が見られる。その残酷な部分こそが伝承の力にもなった。そして、残酷な物語を通して、次の世代へ確実に伝承させたいことを伝えた。

八重山諸島の南が星の伝承は、たとえば野尻抱影氏著『日本星名辞典』には、次のように記されている。

「宮良氏の《八重山語彙》にはパイガブシとして、説話がついている。『南の星の義。昔、波照間島にマナビ(真鍋)と称する四つの乳房を有する婦人ありしかども、国王に呼び出されて、島を去るに及び、我再び帰る能わず、南天に星輝かば我と思いて農事にいそしむべしと云い残せり。果せるかな新星現れたりと云い伝う』(野尻1973)

東アジア民話データベース(NPO 法人 沖縄伝承話資料センター)には、次のような事例が記録されている。

事例1 石垣市大浜(探訪者 牧志氏、上間氏)

乳の三つある女が殿様に呼ばれ、出かける前に二人の子どもに「自分が帰ってこられないときは星となって現れるから、よく見ておきなさい。南の方に水平に朝見えるときは稲を植え、夕方見えるときは稲を刈りなさい。」という。母親は帰ってこず、二人は星を見て稲を作った。

(話者 登野城新明(とのしろ しんめい)氏 1907年生まれ)

事例2 石垣市真栄里(探訪者 高木氏、竹原氏、天久氏)

乳房の4つあるアナビアブという女の人があった。ある時、王様から呼び出しがあった。自分は帰ってこれないと直感して、南の空に星となって老いるからこれを見て仕事をしなさいと言って、王様の所へ行った。そしてそのまま帰らぬ人となった。

(話者 仲山忠英(なかやま ちゅうえい)氏 1906年生まれ)

事例3 石垣市真栄里(探訪者 ①渡嘉敷氏、松田氏 ②武田氏、松村氏)

① 昔、マナビ阿母(アブ)という乳が四つある女の人があった。これは珍しいということで琉球王に呼び出された。マナビ阿母は首里に行ったらもう戻ることにはできないと思い、子供たちにお米の時期と稲刈りの時期に星となって現れると伝えた。この星をハイカ星という。南十字星のことである。

② 昔から稲の収穫の時期と、種植えの時期に、南の空に二つ並ぶ星がある。それは南十字星である。この星にまつわる話がある。昔、乳が四つある女があった。珍しいということで首里王に呼び出された。このとき、女は、もう戻って来れないだろうと思い、夏の米の時期に現れる星を私と思いなさいと言い残して首里にいった。この星を石垣ではハイカ星という。

(話者 前盛菊(まえもり きく)氏 1917年生まれ)

事例4 石垣市真栄里(探訪者 比嘉氏、真栄城氏)

ある村に乳房が四つある女の人があった。そのことが御主加那志(琉球国王)の耳にはいり首里にくるよう知らせが来た。女は生きて帰ることはできないと思い、南のほうに出る星を自分と思いなさいと言って首里に行った。この星をハイカ星という。この人のことをハイカ星アブといった。このハイカ星は南十字星のことだと思う。

(話者 大盛政子(おおもり まさこ)氏 1920年生まれ)

事例5 石垣市真栄里(探訪者 仲地氏)

昔、あるところに乳房の四つある女の人があった。その人は子供に「いつか私が星になるときは、米をとる時期に出るから、六月の米刈り時期は南の空に出てくるからよく見なさい」と言った。だからハイカ星が水平に並んで、南十字星の横軸が水平になる時が、その時期で、横軸の右が少し上がると時期は過ぎていくということだそうだ。

(話者 細工利夫(さいく としお)氏 1920年生まれ)

事例6 石垣市真栄里(探訪者 高江洲氏、比嘉氏)

八重山に胸の四つある女がいて、この女は自分がこのような姿だから結婚できないだろうと思っていたが、やがて結婚することができ、子どもも何名か生まれた。しかし、その女の噂を耳にした琉球の王がこの女を呼びだした。女は自分の子供に「もし私が帰って来なかったら、夏の稲刈りの時期とかに南の空に光る星がでたらそれがお母さんだよ」と言い残していってしまった。子供はそれから長い間、母の帰りを待ち焦がれたが、母はとうとう帰って来なかった。これがハイカ星と呼ばれるようになった。

(話者 武内芳(たけうち よし)氏 1926年生まれ)

事例7 石垣市字石垣(探訪者 照屋氏、眞榮城氏、宮城氏、金城氏)

これはですね、この黒島(くろしま)におっばいが四つある女の人がおりましてね、この人はがかなり美女であったと。この人は結婚して子供が二人か三名かいて夫婦円満に暮らしておると、琉球の王様が四つおっばいがある女の人が居るということを知り、「見たいからこれを連れて来い。」と言うことで、それを在番の役人が伝えてきたからね、これは王様の命令ですから、その女は泣く泣く沖縄の方に行ったということです。その沖縄に行くので、子供と夫と別れるときに、子供たちを前にしてですね、「御主加那志(うしゅんがなし)の命令に背くことはできないので、私は行かなくてはならない。島からこう離れて行く以上は、生涯の別れになるかもしれない。そういうことになったならば、五月、六月の夕方には、真南の方にハイカ星という二つの星が真北に向かって水平に並ぶから、それを私と思って目当てにして作物を作りなさい。」と、子供達にとくとく話して、連れていかれたそうです。それから、そのままお母さんは帰って来ないでいると、そのお母さんの言ったとおりに、ちょうど若夏のころになると星がですね、南の方に上がってきて、そしてまっすぐ二つこちらに並んだので、その子供達はそれを見て、「これはお母さんだ。」と言って、主人は、「家内はああいう星になっている。」と言うことで、その家では、そのハイカ星が並ぶのを基準にして、稲刈りをしたり、種蒔きをしたりして、暗い夜にまでやると大変な豊作になったから、その家の家族は、「ハイカ星というのは豊作の神だ。」と言って、ずっと大事にして拝んでいたそうです。黒島の方は、その話を聞いて、その家に見習ってハイカ星を基準にして同じように作りものをやったら島が栄えたという話なんですね。

(話者 宮里英詳(みやざと えいしょう)氏 1924年生まれ)

事例8 石垣市平得(探訪者 渡嘉敷氏)

夏になると南に二つ並ぶ星がある。ハイカ星とマナビアブである。昔石垣にオッパイが四つある女の人があった。この人は結婚もして子供もいたのだが、オッパイが四つあるの珍しいと沖縄のスイテンガナシによられた。この時、自分の子供たちに、自分がもし帰って来なかったら、南の二つの星になっているからと出て行った。結局、この人は二度と家に戻ることができなかった。これは南十字星の二つではないかと思う。

(話者 竹盛生吉郎(たけもり せいきちろう)氏 1916年生まれ)

#### 事例9 石垣市平得(採訪者 渡嘉敷氏)

昔、橋をいくら作っても流されてしまっとうまくかからない橋があった。ユタにみせるとオツパイを四つ持っている女の人を生き埋めにすれば橋は流されないといった。このユタの言うことは絶対に信じられていたので、首里の王様はオツパイが四つある人を探せと命じた。調べてみると石垣島にいたので、沖縄に連れて帰った。その人には子供がいて、別れるときに、もう会えなくなるかもしれないけど、夏になって南に星が二つ並んでたら、それを自分だと思いなさいと言が残した。その後、橋は二度と流れなくなった。

(話者 田底敏(たそこ とし)氏 1922年生まれ)

#### 事例10 八重山郡竹富町黒島(採訪者 安里氏、遠藤氏)

黒島の宮里部落に乳房が三つある女がいた。その女には二人の子供がいたが、宮里部落の役人が首里に報告すると、その女は三つ乳房があるなら人間ではない。女から油を取って送れとやってきた。大きな鍋が届けられ、役人はその女を鍋に入れて油を取り、王に送った。子供の一人は女の子だったが、母と共に死に、男は一人残り、畑仕事をしながら南風が星(パイガブシ)を歌った。それが南風が星の始まりである。

(話者 高那真牛(たかな まうし)氏 1891年生まれ)

これらの事例より、次のような点が明らかになった。

##### (1) 南十字とケンタウルス座 $\alpha$ $\beta$ の混乱が見られること

南の星というと南十字という知識が広く入ってきた影響を受けている。乳房の4と南十字の関連はないと思われる。

##### (2) 残酷な伝承事例があったこと

事例1～事例8は、国王の命令による別れと、帰って来れないかもしれない別れが語られていて、残酷な伝承は語られていない。一方で、事例9は、橋の建設に伴い生き埋めに(人柱)になるという伝承が語られている。事例10については、鍋に入れて油を取り王に送り、女の子は母とともに死ぬという残酷な伝承が語られている。

東アジア民話データベース(NPO 法人 沖縄伝承話資料センター)に掲載されている残酷な伝承が次の世代へ確実に伝承させたいことは何であったのだろうか。下記の二つの候補があるのではないだろうか。

##### (1) 農耕に星を目標とすること

##### (2) 首里の王様に対する服従と抵抗

#### 14 八重山地方の天文民俗・天文考古学の調査研究を発展させ、構造を明らかにするための議論

### (1) 現地調査が不足しているのか、限界なのか？

八重山地方において記録し、本稿で整理し集成した。そのなかで、石垣島では意外に星名伝承が記録できていない、歩いて話者に出会えない。オリオン等について、もっと多様で豊かな話者の証言があってもよいはずだが出てこない。歩く回数、歩き方、徹底した現地調査がまだまだ不十分であることも考えられる。また、優秀な伝承者が沖縄本島等へ移住したケースも考えられる。ともかく、沖縄本島や粟国島、与論島等に比べて現地調査で多様な星名伝承を記録できないのである。現地調査の限界なのか？ 石垣島は合衆国だ、と言う。いろいろな地域から集まっているということだ。本稿においても、マーペの伝承を訪ねて、野底を調査したが、黒島出身者は既にいなくなり、宮古島多良間からの移住者になっていた。宮古島出身の移住者は、野底の黒島出身者が残した伝承を伝えようと努力をしていたが真に伝承を引き継いだものではなかった。

しかし、現地調査が限界だと断定まではできない。何度も訪問してあきらめかけていたときに優秀な話者と出会うことはいままでも他地域で経験している。限界だと断定できない限り、たとえ成果が思うように得られなくても現地調査を重ねなければならないし、また、いままで調査を重ねてきて成果に結びつけてきた。

未調査地域もある。条件は厳しいが、鳩間島、新城島、小浜島等、調査を実施するかどうか検討を行ないたい。

### (3) 八重山地方以外の他地域の調査

#### i) 異なる文化圏の調査

八重山地方の天文民俗、天文考古学の調査研究の発展は、他地域との比較、関連性がポイントとなる。南西諸島はもちろん、トカラ列島以北の異なる文化圏、特に五島列島、対馬、隠岐等の島嶼部の調査を広げていき、日本の星の基層文化についての伝承資料を整理し、集成していくことが重要である。

#### ii) 移住者の調査

八重山地方から沖縄本島へ移住した人の調査、さらには、兵庫県尼崎市戸ノ内浜西地区、神奈川県川崎市等、移住者の多い地域に沖縄で失われたものが残っている可能性もある。

#### iii) 現地調査とともに文献調査の推進

フィールド調査とともに、文献調査の範囲を広げて、南西諸島、さらには日本の基層文化のなかでの八重山の星名伝承の持つ意義について明らかにしていきたい。

### (3) 神話時代に起こったことが今日まで伝承されている時間軸の分析

天文民俗では、口承、文献で伝えられる数百年のことが、また、天文考古学では神話時代も含めさらに遡った時間軸を調査研究の対象としている。たとえば、波照間における油雨伝説は、神話時代の伝承が今日生きる人びとと連続している。まさに、連続した時間軸で記録できるのが八重山諸島なので

ある。天文民俗、天文考古の日本の基層文化の解明にあたって、本地域が鍵になることは間違いない。

おわりに

かつて、星と暮らしは近かった。暮らしのなかに星があった。時刻、季節を知ることは、星を見ることであった。まずは、アンケート調査及び現地フィールド調査において、星名伝承を語ってくれた話者のひとりひとりに、心から感謝から申し上げたい。また、竹富島においては、上勢頭亨氏に、石垣島川平においては南風野英助氏に、石垣島の星見石については、石垣繁氏に、与那国島においては田原伊明氏、上地艶子氏に、波照間島においては新城勝氏に多大なご協力をいただいた。東アジア民話データベースについては、NPO 法人 沖縄伝承話資料センター副理事長大田利律子氏、那覇市ほしぞら公民館前館長田端研二氏、福里美奈子氏にご協力をいただいた。また、現地調査において、様々なアドバイスをいただき、現地を案内していただいた前石垣島天文台所長宮地竹史氏、星を通じての長年の友人、通事安夫氏、新崎善國氏に紙面を借りてお礼を申し上げます。

## 引用文献

野尻 1973——野尻抱影『日本星名辞典』東京堂出版、1973

内田 1949——内田武志『日本星座方言資料』日本常民文化研究所、1949

稲村 1962——稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962

上勢頭 1976——上勢頭亨『竹富島誌 民話・民俗篇』法政大学出版局、1976

住谷・クライナー 1977——住谷一彦・クライナー ヨーゼフ『南西諸島の神観念』未来社、1977

高木・星加 1980a——高木隆、星加弘文『『星見様』の研究(上)』『沖縄文化 53 号』沖縄文化協会、1980

高木・星加 1980b——高木隆、星加弘文『『星見様』の研究(下)』『沖縄文化 54 号』沖縄文化協会、1980、pp.71-93。

玉城 2000——玉城功一「ひーすくり・じらば」竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集 第3集』竹富町教育委員会、2000

下嶋 1980——下嶋哲朗『沖縄・聞き書きの旅』刊々堂出版社、1980

宮良 1972——宮良高弘『波照間民俗誌』木耳社、1972

黒島 1989——黒島為一「人頭税石？—八重山からの問題提起」『地域と文化 第52号』、1989

黒島 1999——黒島為一「星圖」「天気見様之事」「星見様(仮題)」『石垣市立八重山博物館紀要第16・17号』石垣市立八重山博物館、1999

- 宮地 2009——宮地竹史「星見石の探求～幻の「川平湾の星見石発見」の顛末～」『国立天文台ニュース No.188』2009
- 島村C——島村修氏による
- 石垣C——石垣繁氏による。
- 新崎C——新崎善國氏による。
- 勝連C——勝連松一氏の父親(勝連文雄氏、大正6年生まれ、波照間出身)による。
- 新城C——新城勝(あらしろまさる)氏による。
- 新城2018——新城勝「天文」竹富町史編集委員会『竹富町史第七巻波照間島』竹富町役場、2018
- 喜舎場 1967——喜舎場永珣『八重山民謡誌』沖縄タイムス出版部、1967
- 喜舎場 1970——喜舎場永珣『八重山古謡 下巻』沖縄タイムス社、1970
- 長谷川 2002——長谷川一郎氏が2002年に行なった計算
- 福澄C—福澄孝博氏による調査
- 北尾 C—北尾による調査
- 北尾AC—北尾が1980年代に実施したアンケート調査
- 北尾 1984——北尾浩一「[続]アンケート調査による南西諸島の星の民俗」『天界 第711号』東亜天文学会、1984
- 北尾 2001—北尾浩一『星と生きる 天文民俗学の試み』ウインかもがわ(発売 かもがわ出版)、2001